

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463230

研究課題名(和文) 看護実践能力の向上に向けた看護学生版リフレクション・フレームワークの開発

研究課題名(英文) Development of reflection framework (a nursing student version) for improving nursing practical skills

研究代表者

河部 房子 (Kawabe, Fusako)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：00251843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、看護学生の看護実践能力の育成を促すリフレクション・フレームワークの構築である。看護学生のリフレクションに関する国内文献を概観した結果を元に、学生が記述するリフレクティブジャーナルとその分析方法を検討し、リフレクションの実態を分析した。学生のリフレクションの特徴として、看護実践場面において生じた感情の性質が、その後の評価視点と連動していた。また患者のアセスメントは適切であるにもかかわらず、看護の方向性に照らした評価はされない傾向にあった。実践場面で生じた感情を起点とする学生のリフレクションプロセスの中で、患者の健康状態に照らした関わりの評価ができるような外的刺激が必要である。

研究成果の概要(英文)：The study purpose is to develop reflection framework for encouraging to cultivate nursing practical skills among nursing students. On the basis of the review results from the Japanese literatures in terms of nursing student reflection, the study analyzed the actual condition of reflection after examining reflective journal described by students and its analytical method. As a characteristic of the student's reflection, the nature of emotions generated in the actual nursing practice scene was linked to the subsequent evaluation viewpoint. In addition, although the patient assessment was appropriate, it tended not to make an evaluation with reference to a direction in nursing practice. In the student reflection process originating from emotions generated in practical situations, an external stimulus will be required to enable the students to make an evaluation through their involvement with a patient health condition.

研究分野：看護教育

キーワード：看護学生のリフレクション実態 看護の評価視点 感情の揺らぎ

・研究開始当初の背景

看護学生の看護実践能力の育成において、臨地実習は、現実の看護実践体験を学生に与え、看護実践能力育成に直結する重要な学習機会である。各看護系大学においては、この実習体験を個々の看護実践能力育成に向けた学習となるよう、実習体験の振り返りや自己評価の方法といった教育内容を検討している。近年では、経験の意味を深める学習としてリフレクションを導入する取り組みもなされ、その成果が報告されている(田村ら、2008)。しかし、リフレクションを推進する具体的な教育方法は明らかになっておらず、看護基礎教育におけるリフレクションの導入は未だ試行段階にあるといえる。

看護学生のリフレクションに関する先行研究では、教育評価研究が多くなされ、リフレクション導入による教育効果として、患者への関心の高まり(野口ら、2012)、実習目標や自己課題の明確化(谷口ら、2010)などが報告されている。またリフレクションに必要な基本的スキルが明らかになっており(Bulman,C.& Schutz,S. 2008)これらのスキルに焦点をあて学習成果を分析した研究も認められる(中田ら 2004;安藤ら 2008)。しかし、これらはいずれも結果に焦点をあてたものであり、他者との相互作用の中で生じるリフレクションの実態や、リフレクションを促した外的刺激というプロセスを構造的に明らかにしたものは認められない。

個人の内的プロセスであるリフレクションを対象化し支援する方法論として、様々なリフレクション・フレームワークが既に解明されている(Gibbs.1988 ; Discoll.2007)。しかしこれらは看護の独自性を反映したものではないために、これらのフレームワークを看護学生の看護実践能力の育成にどう活用するかは検討途上にあるといえる。また、研究代表者が実施した看護学生のリフレクションプロセスの分析からは、看護体験の記述や、その意味づけの困難性が明らかとなっており(丸茂・河部、2009)、以上から、看護学の修得途上にある初学者としての特性を反映したリフレクション・フレームワークが必要と示唆された。

・研究の目的

本研究の最終目的は、看護学生の看護実践能力の育成を促すリフレクション・フレームワークの構築である。この目的に向け、以下の2つの研究目標を掲げた。

研究目標1．看護学生の、自身の看護実践体験に対するリフレクションに関する日本国内の文献を概観し、看護学生のリフレクションを促進する要因として何が解明されているのかを明らかにし、看護学生のリフレクション・フレームワークを検討する基礎資料とする。

研究目標2．看護学生のリフレクションの実態に基づき、自己の看護実践体験に対する看

護学生のリフレクションの特徴を明らかにする。この結果より、看護実践能力の育成を促すリフレクションに必要な要素を検討する。

・研究の方法

1．研究1

1) 文献の抽出と選定

文献検索は、国内最大の医学看護学文献情報データベースである医学中央雑誌 web 版 ver.5 を用いて、キーワード「リフレクション/振り返り/反省/省察」「看護学生」を掛け合わせ、2016年4月に検索した。検索でヒットした468件の文献のうち、重複を除いた448件のタイトルと抄録を読み、看護学生の臨地実習における自身の看護実践体験を振り返っている文献18件を選定した。選定された文献を精読し、学生自身が自己の看護実践体験を振り返っている事象を、分析対象として扱っている文献12件を分析対象とした。

2) 分析方法

看護学生の看護実践体験に対するリフレクションに関する先行文献を概観するために、発行年の新しいものから降順に文献番号をつけ、著者及び発行年、タイトルと掲載誌情報、研究目的、研究対象(教育機関・学年・人数)、研究方法、結果・結論について一覧表にした。次に、各文献において学生が実施するリフレクションの目的、方法、実習の種類と学年、教員の関与の仕方について整理した。

2．研究2

1) 研究対象

A 大学看護学科2年次生のうち本研究への参加同意の得られた学生9名。対象学生は、基礎看護学実習を終了した後に開講される看護技術論(看護過程展開)を受講した学生である。この授業の終了時に課題レポートを課した。課題レポートの内容は、研究1の結果を元に、基礎看護学実習における自己の看護実践体験1場面の記述、患者の健康状態の再アセスメント、再アセスメントの結果をふまえた自己の関わりの評価、とした。本研究では、対象学生の課題レポートを分析対象とした。

2) 分析方法

(1) レポートの記述から、患者の健康状態を示す事実、学生が関わった看護場面に関する事実、看護場面の振り返りに関する事実、を選択し、研究素材を作成する。この時点で、～ の事実記載が不十分なものは、分析対象から除外する。

(2) の事実に基づき、研究者が患者の健康状態および看護の方向性をアセスメントし、【患者の健康状態と看護の方向性】として記述する。

(3) (2)の結果と の事実に基づき、患

者の健康状態に即して必要な看護を提供できる実践能力という観点から、看護学生が関わった看護場面の特徴を検討し、【看護場面の特徴】として記述する。

(4)(3)の結果と の事実に基づき、学生は自身の関わりをどう振り返っているのかを検討し、【学生の振り返りの特徴】として記述する。

(5)(4)の結果見いだされた特徴を元に、患者の健康状態に即して必要な看護を提供できる実践能力という観点から、看護実践能力の育成を促す刺激を検討する。ここまでを個別分析とする。

(6)個別分析の結果見いだされた5の結果を比較検討し、看護実践能力の育成につながるリフレクションに必要な要素を考察する。

なお研究2は、研究者所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## ・研究成果

### 1. 研究目標1

分析対象の12文献のタイトル、研究目的、研究対象、研究方法、研究結果より、文献の概要を述べる。

#### 1) 研究目的からみた概要

看護学生のリフレクションの様相の解明が5文献、リフレクションによる学習内容の深まりや効果の検討が3文献、リフレクションを促す教員の関わりへの解明が2文献、その他(看護学生が振り返りたいと思った場面の構造の解明、リフレクションの方法変更による効果の検証)が2文献であった。

#### 2) 研究対象からみた概要

研究対象として、基礎看護学実習を経験した学生を対象としているものが6件、精神看護学実習を経験した学生を対象としているものが2件、成人看護学実習を経験した学生を対象としているものが1件、実習の種類は問わないもの3件、であった。

#### 3) リフレクションの方法からみた概要

学生が実施しているリフレクションの方法として、リフレクティブジャーナルの記述が8件、教員との面接が4件、リフレクティブジャーナルへのコメント1件、グループトークが1件、プロセスレコードの記述、分析が1件であった。このうち、リフレクティブジャーナルの記述と教員との面接とを組み合わせているものが2件あった。

リフレクティブジャーナルの質問項目は、既存のリフレクションプロセスを用いているものと、研究者が独自に考案したものとがあった。いずれの場合も、リフレクションする看護場面を1つ選び、その時の自身の感情も含めて記述する、という点は共通していた。しかし、その場面を分析する規準については、場面の良し悪しとその判断根拠を記載するもの、自身の価値観や強み・弱みについて記

載するもの、患者の看護の方向性からみた場面の評価を促すもの等、多様であった。

以上の結果を総括する。看護学生の看護実践体験に対するリフレクションの様相に関しては、既に多くの研究がなされており、その学習の質に関して分析が進められていること、また看護基礎教育課程の初期段階からリフレクションが導入されていることがわかった。リフレクションの方法としては、リフレクティブジャーナルの記載が多く、いずれも看護実践場面を記述させていた。しかし、記述された看護実践場面の分析・評価については、その手法は様様であり、看護学生の看護実践能力の育成につながるリフレクションの方法としては未だ確立されていないといえる。また、リフレクティブジャーナルの記載と教員との面接を組み合わせ実施している文献も複数あり、このことは、リフレクティブジャーナルの記載のみでは学生自身の効果的なリフレクションを促すことが難しいことを示していると考えられた。

以上より、看護学生のリフレクションを、学生自身の看護実践能力の育成につながるための教育方略として再構築することの必要性を確認した。また、リフレクションの方略を定めるにあたっては、看護学生の看護実践能力の育成に向けた、看護実践場面の分析方法を考案し、リフレクティブジャーナルに組み込む必要があると考えた。分析対象となった文献の中には、研究者が看護学生の受け持ち患者の健康状態と看護の方向性を再分析し、その結果を規準として、看護実践場面における看護実践能力とは、対象の健康状態に即して必要な看護を提供できる能力であり、この文献で考案された手法を元に、研究2におけるリフレクティブジャーナルを作成し、研究2の分析方法にも組み込むこととした。

### 2. 研究目標2

分析対象となった事例は、9事例中、5事例であった。除外された4事例の特徴は、看護実践場面がまとめて記述され、事実関係が読み取れない、その時点での判断や思いと場面の記載時の思いとが混同し区別できない、評価として記載された内容が生じた時点が特定できない、であった。

以下に個別分析の結果について、1事例を元に述べる。

#### 1) 分析結果

##### 患者の健康状態と看護の方向性

事例Aの受け持ち患者は、心不全からの回復過程にある老年期の患者。心不全からの回復が進まず、入院後3週間経過しても、酸素投与が必要な状態である。長期臥床による2次障害を予防しつつ、患者自身の心機能と生活動作(酸素消費量)との調和をはかることが必要。また、患者自身も現在の身体状態を

患者なりに捉えた上で、できるだけ心穏やかに前向きに日常生活を送ることが必要である。

#### 学生の関わった看護場面の特徴

学生が記述した看護場面は、学生が病室を出る際に寂しそうな表情をしていることに気づき、意図的に関わりを深めながら、患者に喜ばれるケアがしたいと考えて洗髪と足浴を実施した場面であった。

この場面で学生は、病室を去る時の患者の様子を、少し寂しそう、「またおいで」と言っているように感じ取り、患者の病室に訪室するのはプライベートな空間に踏み込むことになるという、それまで抱いていた考えを否定し、自ら少しずつ関わりを進めた。そうしてコミュニケーションが深まっていく中で、患者から現在の気がかりとなっている様々な身体状況や家族への思い、これまでの生活過程に関する様々な話を聞いた。患者が自らこのような話を学生にしたということは、学生との会話を患者自身も楽しんでいると捉えられる。患者はベッドから動けない、つまり患者自身では気を紛らわせることが難しい状況にあり、そのような状況の中で学生とのコミュニケーションを楽しんでいたならば、心の安定をはかるということにつながった可能性がある。

一方で、会話自体が酸素消費量を増加させ、それが患者の心機能に過度な負荷をかける可能性はあるが、そのような状況が生じていたか否かは不明である。あるいは、会話自体が患者にとって適度な心負荷になっているかもしれない。

また学生は、コミュニケーションをとっていく中で患者の表情の変化に気づくようになり、その変化から患者の思いを読み取れるようになった。入院してからの経過日数を何度も口にする様子から、悲しそうと感じ、心の底から患者が喜ぶことをしたいと考え、教員に相談し、足浴と洗髪を実施した。患者から快となった反応や、熟眠できたとの反応を得ており、快刺激を与え、自律神経バランスの調和につながったと考えられる。一方で、このケア行ったことにより適度な心負荷となったのかについては不明である。

以上より、看護場面の特徴を以下のように記述した。

#### 【看護場面の特徴】

自分が退室する時の患者の表情から、その裏にある思いを感じ取り、それまでの自分の考えを否定し、自ら関わりを深めた。その中で患者の思いに関心を寄せ、感じ取った患者の心情に対して、技術的な関心を注ぎ、患者に喜んでもらうことを目指した関わりがしたいと気持ちが動く。しかし具体的な方策は思い浮かばず、教員の助言を得てケアを実施し、患者からの反応を、喜んでもらえたと受け止める。

#### 学生の振り返りの特徴

の結果と、レポートに記述された、看護場面の振り返りに関する事実とを照合し、学生は自身の関わりをどう振り返っているのか、検討した。以下、「」内は、学生の記述内容を示す。

学生は、患者と自分との距離の取り方、という観点から振り返った。自分の思い込み（先入観）を否定して自ら患者と積極的に関わる方向に転換し、それが患者のことを深く知ることにつながった経験から、コミュニケーションをとることに臆病になっていた自分を認め、それではダメだと振り返った。「同時に、こちらが近づいただけ、患者が自分をみていることを自覚しなければならない」という記述からは、コミュニケーションをはかって相手に近づくことで相手との関係性も深くなるが、そこを踏み出さなければ看護は始まらないという気づきが読み取れた。「患者の様子をうかがいながら距離を縮められたことは非常に良かった」と、関係性を深めることを評価する一方で、「そこからのどんなケアが効果的かを自力で考えられなかったことが反省点」と、近づいてみたもののその先の看護の展開を自力ではできなかったと評価している。「今回の実習に関しては、患者を我慢させた可能性があるが、患者が本心から喜んでくれるケアをしたいと思います、実施し、喜んでもらえた。この点に関しては非常に成長できた」と記載している。行ったケアについて、その意味を、患者の立場からではなく、自分自身が患者のためにと心が動いた変化に焦点を当て、そのような心でケアを実施し、患者に喜んでもらえたことを、成長できたと評価している。

以上より、学生の振り返りの特徴を以下のように記述した。

#### 【学生の振り返りの特徴】

患者の心情について深い関心を注ぎ、他者の力を借りながら実践できた看護場面と評価する。

患者へのマイナスもあったかもしれないとしつつも、患者の心情に対して深い関心を注いだ自身の変化に注目しており、患者の健康状態に対する関心が薄いことには気づいていない。

自力でケアを考えられなかったことから、ケアの方法や留意点についての知識不足とする。

#### 看護実践能力の育成を促す外的刺激

の結果を元に、患者の健康状態に即して必要な看護を提供できる実践能力という観点から、看護実践能力の育成を促す刺激を検討した。

A 学生は、患者の健康状態や看護の方向性は的確に記載されていたにもかかわらず、その方向性に照らした時に、自身の関わりがどういう意味をもつのかに関する記述は認められなかった。「患者にとってマイナスがあ

ったかもしれない」という記述から、健康状態に照らした関わりの評価については、曖昧なままに残していると読み取れた。そこで、この学生に必要な刺激として、『行ったケアが、回復しつつある患者の心機能にどのような負荷をもたらすのか、それは必要な負荷であるのかかを問いかける』ことが必要と考えられた。また、学生は、患者の心情への深い関心が注げたことを、自身の成長と自己評価している。学生が行ったケアが、患者の健康状態にとってどのような意味をもつのかについての評価結果を加えることで、自身の成長を患者の回復過程を促す看護につなげるために、健康状態に照らした評価が必要であることへの理解を促す必要があると考えられた。

## 2) リフレクションに必要な要素の検討

全事例の個別分析の結果を比較したところ、以下の共通性を認めた。いずれも、看護実践場面において生じた感情の性質が、その後の分析・評価の視点と連動していた。例えばB学生は、想定とは異なるケアを提案され、準備不足を危惧しながらも、患者にとって良いケアとなるよう実施し、患者から喜ばれた実践場面を振り返ったが、評価は、段取り良くケアを進めるための学習という観点からの評価であった。またC学生は、弾性包帯の巻き方が不適切であることに気づきながらも、その場で患者に関わることができなかった後悔から、どうすればその場で患者に必要な指導ができたのかという観点から評価していた。このように、実際の看護実践場面で生じた感情がリフレクションプロセスに大きく影響していた。一方で、全学生が、適切な再アセスメントを行っていたにもかかわらず、患者の看護の方向性に照らした評価がなされていたのは5名中1名のみであった。実践場面で生じた感情は、リフレクションの起点として非常に重要であり、その感情の性質がリフレクションプロセスを左右すると考えられた。この感情を起点とする学生のリフレクションの筋道の中で、患者の健康状態に照らした関わりの意味付けがなされるような外的刺激をリフレクティブジャーナルの中に組み込む、あるいは教員との対話の中に組み込む等、が必要であると考えられた。

## ・主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

河部房子、山本利江、和住淑子、錢淑君、自己の看護実践体験に対する看護学生のリフレクションの特徴、日本看護学教育学会 第27回学術集会、2017年8月17日18日、宜野湾市。

## ・研究組織

### (1)研究代表者

河部 房子 (KAWABE, Fusako)  
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授  
研究者番号：00251843

### (2)研究分担者

山本 利江 (YAMAMOTO, Toshie)  
千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：70180926

和住 淑子 (WAZUMI, Yoshiko)  
千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：80282458

錢 淑君 (Chien, Shu Chun)  
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授  
研究者番号：50438321